

分担研究報告

「生物テロに関する研究」

研究分担者 齋藤 智也

令和4年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）
「CBRNE テロリズム等に係る健康危機管理体制の国際動向の把握及び国内体制強化に向けた研究」

分担研究報告書

生物テロに関する研究

研究分担者 齋藤智也

（国立感染症研究所感染症危機管理研究センター・センター長）

研究要旨

絶え間のない国際的なテロ活動などの国際状況を背景に、我が国でも CBRNE テロリズム（以下、CBRNE テロ）の脅威は継続している。本研究では、世界健康安全保障行動グループ会合（GHSAG）を含む、国内外のネットワークを通じて国内外の最新の科学的・政策的知見を集約し、各国の法整備・政策・実事例の分析を行うと共に、諸外国・GHSAG 等で先進的に検討されている各種ガイドライン・対応マニュアル等を踏まえ、本邦でも活用可能な資料として整理を行う。その結果を厚生労働省に提示し、本邦での CBRNE テロに対する健康危機管理体制強化に向けた提案することを目的とする。特に本分担研究課題では、生物剤及びリスクコミュニケーションの分野についての情報収集と還元を行うことを目的とする。本年度は、世界健康安全保障行動グループ（GHSAG）バイオワーキンググループ（BioWG）及びその関連会議に参加し、会議での意見交換、ヒアリング及び文献収集を通じて得られた情報を、NBC ネットワーク専門家会合を通じて共有した。特に、海外の生物テロ演習事例を紹介し、内閣官房、厚労省、消防、警察、自衛隊、病院関係者らと意見交換を行なった。具体的なシナリオベースの議論と、他国のオペレーション上の課題認識等の共有は、関係機関との連携推進に非常に有効であったと考えられる。

A. 研究目的

東日本大震災以降、危機における国の役割の強化が課題となっている。わが国は、絶え間のない国際的なテロ活動などの国際状況を背景に、CBRNE テロリズム（以下、CBRNE テロ）の脅威もある。また、新型コロナウイルス感染症等の影響や健康危機管理への意識の高まりとともに、CBRNE テロに関する国際動向を適確に把握し国内施策に反映することが重要な課題である。更に、CBRNE テロで使用される危険物質についての情報収集/共有・分析・対応検討や、災害・危機管理情報等を迅速にリアルタイムに知ることができるリアルタイム危機管理情報ソリューションの利活用、サイバーテロなど従来とは異なる形態のテロリズムへの対応策についても、検討が必要である。

そこで、本研究においては、世界健康安全保障行動グループ会合（GHSAG）を含む、国内外のネットワークを通じて国内外の最新の科学的・政策的知見を集約し、各国の法整備・政策・実事例の分析を行うと共に、諸外国・GHSAG 等で先進的に検討されている各種ガイドライン・対応マニュアル等を踏まえ、本邦でも活用可能な資料として整理を行う。その結果を厚生労働省に提示し、本邦での CBRNE テロに対する健康危機管理体制強化に向けた提案することを目的とする。

特に本分担研究課題では、生物剤及びリスクコミュニケーションの分野についての情報収集と還元を行うことを目的とする。

B. 研究方法

世界健康安全保障行動グループ（GHSAG）バイオワーキンググループ（BioWG）及びその

関連会議に参加し、会議での意見交換、ヒアリング及び文献収集を通じて得られた情報を、NBC ネットワーク専門家会合を通じて共有した。

(倫理面への配慮)

該当しない。

C. 研究結果

令和4年度に行われた世界健康安全保障行動グループ(GHSAG) バイオワーキンググループにおける生物テロに関する議論と海外で行われた生物テロ対応演習の内容を共有し、今後の生物テロ対応手順の検討状況、特に、G7に向けた対応手順検討の材料とした。また、自衛隊、消防、警察への情報提供とアウトリーチを行い、情報提供を行ったほか、消防における訓練の視察も実施した。

生物テロシナリオに関しては、海外における演習事例として、手製爆弾とともに毒素を散布されたと想定される事案を令和4年度第1回NBC ネットワーク専門家会合で報告し、内閣官房、厚労省、消防、警察、自衛隊、病院関係者らと意見交換を行なった。特に、当該シナリオにおける

- ・被災者の管理
- ・感染者の管理
- ・感染管理

について、討議した。

D. 考察

海外の演習事例は、CBRNに向き合うためのフォーマルな連携とその細部の作り込みが丁寧に行われている印象を受けた。非常に本気度が高く、過去の演習で明らかになったギャップを埋め、それをテストする、という位置付けが明確な演習だった。これ

らの、CBRN対応という多機関連携を要する事象について、計画から演習、そのフィードバックに至るプロセスは非常に示唆に富んでおり、国内関係者の動機づけに有用であったと考えられる。病原体を専門的に扱う機関の役割や、保有すべき機能(検査や検体採取の専門知識がある機関に現場に急行可能な部隊を設置し、機微情報も扱える)といった点についても有用な知見であったと考えられる。日本も要素では決して引けを取らないが、“カオスが生じる”ような「本気」の訓練・演習に真摯に取り組む必要がある。

引き続き同グループでの情報共有を継続し、生物テロ対応に関して、警察・消防との情報共有・強固な連携を推進していく意義がある。今後もアウトリーチを継続し、消防等との図上演習に参加して関係を構築しつつ、生物テロ対処に関する合同演習の企画を検討する必要がある。

E. 結論

海外の生物テロ演習事例を紹介し、内閣官房、厚労省、消防、警察、自衛隊、病院関係者らと意見交換を行なった。具体的なシナリオベースの議論と、他国のオペレーション上の課題認識等の共有は、関係機関都の連携推進に非常に有効であった。

G. 研究発表

1. 論文発表

該当なし

2. 学会発表

齋藤智也. 生物テロを想定した海外の演習事例について. 令和4年度第1回NBC ネットワーク専門家会合. 2023年2月.

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得 :
2. 実用新案登録 : なし。
3. その他 :